
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 74

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1461. 認識の翼と作曲実践
- 1462. 何かを暗示する二つの夢
- 1463. 効率化される時間と豊かな生命としての時間
- 1464. 創ることと現象としての自己の考究
- 1465. 二つの印象的な夢
- 1466. 二年目のプログラムの開始に向けて解決すべき問題
- 1467. 「ポイエティック・ロジック」と「内省的反復」
- 1468. 65歳からの学士入学の検討
- 1469. 「実証的教育学」のプログラム開始に向けて
- 1470. 馬鹿の先
- 1471. 多文脈的熟成学習
- 1472. 日々が新たな誕生日であるように
- 1473. 真の芸術体験と「言葉の断食」
- 1474. 一人の人間の一生
- 1475. 専門領域の螺旋的深まり
- 1476. フランツ・シューベルトとの対話へ向けて
- 1477. 私たちを待つ問い
- 1478. 言葉のクオリア
- 1479. 感覚世界に広がる無数の扉
- 1480. 辛さを抱え、無音世界からの一步へ

一日が終わりに近づき、それと同じように一日の自分の仕事も終わりに近づいている。今日は天気に恵まれ、とても清々しい一日だった。八月も終わりに近づいているが、結局夏らしい暑さを感じることは全くなかった。本日ランニングの帰りに訪れた行きつけのチーズ屋の店主とも話をしていた通り、もう秋の足音が聞こえる。

先ほど夕食を食べている最中、食卓の窓から外の通りに目をやると、白と黄土色のまだら模様の猫が道端をゆっくり歩いていた。その猫を見たとき、「いつもの猫だ」と思った。この猫は、おそらくこの住人の誰かが飼っている猫だと思う。いつも同じ場所をうろうろしているこの猫の活動範囲は狭そうだ。

猫と同じく物理的な肉体を持つ私たちも、身体的な活動範囲というのは意外と狭いのではないだろうか。いつも同じ場所で生活をし、いつも同じ職場に向かう。そのような形で私たちの日々は形成されているのではないかと思う。物理的な肉体が私たちの活動範囲を制限することについて見方を変えてみると、私たちは自由のない檻の中で生活を強いられていると見ることもできるかもしれない。

しかし一つ忘れてはならないことがある。それは、私たちの精神的活動範囲は無限に広げることができるということだ。身体的にいくら活動範囲が狭められようとも、私たちは自らの認識という翼を大きく広げ、精神までも狭い檻に入れてはならないように思う。こうした認識の力は「想像力」と呼んでいいものかもしれない。そして、こうした想像力が多いに膨らみ、豊かになる時、それは「創造力」へと変容していくのではないかと思う。

毎日同じ場所で暮らし、同じ場所で働いていたとしても、想像力という名の翼を羽ばたかせ、創造的な活動に日々従事していきたいとふと思った。あの一匹の猫から教えられたのはそのようなことであつた。

今日は出版記念ゼミナールの第四回目のクラスの説明資料を作り、いくつか仕事上のメールを返信する以外は、全ての時間を作曲の学習と実践に充てていた。チーズ屋の店主が述べた、「あと二

週間で新しい学期が始まるわね」という言葉を受けて、残りの夏季休暇を十分に活用する形で、音楽言語の理解力と活用力をできる限り高めたいという思いを新たにした。

北欧旅行から帰ってきて以降、音楽理論や楽典の学習をすることがゲームをすることと同じような感覚になっている。これはある種の肯定的な中毒状態だと言ってもいいだろう。すでに論文を書くことや日記を書くことはほぼ中毒状態だと言っても良く、作曲に関してもある種の中毒状態を生み出したいと以前から考えていたが、まさかその前段階の音楽理論や楽典の学習に関してもそうした状態になるとは思ってもいなかった。これはおそらく、デンマークやノルウェーで訪れた美術館や博物館が刺激になっているのだと考えられる。

一つの曲を作ることは、どこか一つのパズルを解くようであり、同時に自分独自のパズルを作り出すような感覚がある。こうしたゲーム感覚に加え、何より作曲にのめり込ませるのは、やはり自分の思考や感覚が音として奏でられることにあるだろう。自然言語で自らの思考や感覚を表現するのとは、またひと味もふた味も異なった表現物が作曲によって生み出される。

今日の仕事はひと段落したため、就寝までの時間を作曲の学習と実践に充てたいと思う。2017/8/22(火)

No.107: Profound Dimensions of the Inner World

Last night, I captured the richness and depth of the inner world. At the same time, I intuitively understood that there were an infinite number of doors for the richer and deeper dimensions in the inner world. A key to opening each door is a word.

Cultivating our words enables us to enter more profound dimensions of the inner world. Although we often separate words and senses, both of them are intrinsically inseparable. Unless we overcome the dualism of words or senses, we will not be able to go into profound dimensions of the inner world. Monday, 8/28/2017

1462. 何かを暗示する二つの夢

足をプールの水に浸しながら、プールサイドで横たわっていると、大きな犬が現れ、不意に顔を舐められた。飼い主らしい二人の夫婦が私の近くにやってくると、その犬は飼い主の顔を舐め回し始めた。

そのような夢を昨夜見た。この犬はとんでもない大きさであり、他の哺乳類動物かと思ってしまうほどであった。プールの中で四人家族が遊んでおり、私の近くに2歳ぐらいの男の子が浮き輪につかまりながら浮かんでいる。残りの家族三人はあえてこの男の子を一人にさせておこうという意図があるようであり、男の子から離れたところにどんどん進んでいき、向こうの方で遊び始めた。すると男の子が突然泣き始め、三人の家族が仕方ないとばかりに、再びその子のところにゆっくりと近づいていった。

家族がその男の子をプールサイドに上げたところまでの一部始終を眺めていると、突然大きな犬が現れ、私の顔を舐め回し始めた、というのが夢の詳細だ。夏の暑さを結局感じる事のなかった日々において、こうした夏を想起させる夢を見たことは不思議であった。今年の夏は一度もプールで泳いでいないため、なぜプールが夢の舞台になったのか不思議である。プールを舞台にした夢が終わりを告げた後、また別の夢を見た。

夢の中で私は、父と他の数名の研究者とともにロボットを作っていた。未知の巨大な生物を撃退することがプロジェクトのミッションとなっており、大きな人型ロボットを作ることが求められていた。研究所にはすでに一体の完成したロボットが待機しており、それをフィールドに送り出すことになった。ロボットの動きは全てモニターカメラで確認することができ、ロボットと同じ目線で世界を見渡すことができる。

ロボットが現場に到着すると、巨大な生物が突然姿を現した。その戦場には、ロボット以外にも、人間の戦闘部隊や戦車部隊も駆けつけており、巨大生物との壮大な戦いが始まった。モニターからロボットの動きを確認すると、どうも動作が鈍いようだ。特に、ロボットが繰り返す攻撃がうまく巨大生物に命中しないようであり、むしろ仲間に被害を与えることすらある。

そして最大の欠陥は、ロボットが高い場所から地面に着地した時に、その衝撃が全身に伝わり、動作がさらに鈍くなるようだった。なんとか今回の巨大生物を撃退することができたのだが、その被害はとても大きなものであり、ミッションが成功に終わったとは言えない状況であった。

ロボットが研究所に引き上げてくると、そこから改良に向けた会議を行った。私からの提案として、ロボットの足の裏にゴムをつけてクッション性を確保するのはどうかと申し出た。足の裏が今のような素材であれば、高い場所からの衝撃に耐えることができないというのが私の考えだった。あるいは、ロボットの機械的な不自然な動きを考えると、いっその事、ロボットの全身をゴム素材にするのはどうかと提案した。

全員がこの提案を好意的に受け止め、そこからまたロボットの改良が始まった。会議の終わりに父が、「これまですでに三体のロボットが犠牲となった・・・」という言葉を残した。「今回のミッションを完遂させるためには、そうした犠牲は仕方ないのではないか」という言葉を返そうと思ったが、ロボットにも魂と生命が宿っているように思えて仕方なく、これまでのロボットの犠牲を仕方ないという言葉で片付けてはならないと思った。そのため、私は父に何も返す言葉がなく、黙ったままここから新しいロボットの製作に向けて尽力していこうと思った。そこで夢から覚めた。

何かを作ることに伴う犠牲と、それを犠牲と捉えてはならない、あるいは犠牲ではないことを暗示するような不思議な夢だった。2017/8/23(水)

No.108: One Inner World

I would like to correct my previous entry. The last entry addressed profound dimensions of the inner world. Yet, the entry seemed to postulate that the inner world has two worlds of senses and words respectively. The presupposition was not accurate.

In reality, the world of senses and that of words are interdependent; they create one inner world. That is why the inner world is neither dualistic nor pluralistic, but unitaristic. Monday, 8/28/2017

1463. 効率化される時間と豊かな生命としての時間

とてもどかな時間と空気が流れる一日。今日も天候に恵まれ、優しい風が吹いたり止んだりしている。

午前中、現在協働研究を進めているある組織の方々とオンラインミーティングを行った。その後、昼食を買いに近所のスーパーに出かけた。自宅を出てすぐの運河で、二人の子供たちが釣りをしている姿を見かけた。釣り竿を垂らし、魚がかかるのを待ちながら、何やら小さな声で会話をしている。

この辺りで一体どのような魚が釣れるのか非常に関心がありながらも、二人に話しかけることをせず、ゆっくりと二人の前を通り過ぎた。今日は外に出かける絶好の日であり、このようにのどかに釣りをするのも悪くない。

時の流れる速度がとても緩やかであり、そうした緩やかな時の流れが私たちに癒しをもたらすかのよう思えた。こうした緩やかな時の流れに触れる時、都市部で流れる異常なほどに早い時間の流れに考えを巡らせずにはいられない。効率性は確保されていながらも、それが過剰であり、機械的な匂いのする時の流れ。それは人工的に脚色された、とても不自然な時の流れのように感じられる。

私たちは本質的に、過剰に効率化された時間の中で生きることにはできないのではないかと思う。言い換えると、私たちが日々を充実したものにし、幸福感を感じながら生きることに関して、異常なほどに早い時間の流れはそうした生の実現を妨げてしまうのではないだろうか。機械的に異常な速度で流れる時間の中で、私たちは充実感や幸福感など感じることはできないのではないか、という強い思いがある。効率性至上主義が生む異常な時の流れは、現代人を間違いなく疲弊させている。そのように思えて仕方ない。

スーパーに向かうまでの道中、今の生活拠点に流れる時間の緩やかさに改めて感謝をした。効率化された人工的な時間の中では涵養できないものがあり、生み出しえないものがある。生活を効率化すればするほどに、大切なものが失われ、それに付随して私たちはどんどん消耗していく。そうした状況を見るにつけ、何のための効率化なのかを疑わざるをえない。結局、効率化された時間の

中では私たちは疲弊する一方であり、人生の質がないがしろにされてしまい、日々の生活の中に充実感や幸福感を見出すことができなくなってしまうのではないだろうか。

これは現代社会が抱える一つの大きな問題だと思う。スーパーからの帰り道も、相変わらずここに流れる時の緩やかさを強く実感していた。全てが緩やかに、あるべき速度で進行していく。ここでの時の流れは、効率化によって全てが均質化してしまった時の流れではなく、各々の事物固有の時間が折り重なっている。今私が感じている豊穡な時の感覚質は、おそらく多様な事物に固有の時間が一つの織物として生み出されていることからもたらされている。

それは決して効率化という発想では生み出されない時間感覚である。時間の効率化は、多様な事物に固有の時間を大部分殺す形で一本化させることを見えない前提としている。一つ一つの事物に生命が宿るのと同様に、それら一つ一つの事物が生み出す固有の時間にも生命が宿る。私たちはいかに生命としての多くの時間を殺しているかということ、そして私たちはいかに単色な世界で生きながら、疲弊の方向に向かっているのかということを考えなければならないのではないか。2017/8/23(水)

No.109: Towards the Actualization of Universal Music

Respecting Edvard Grieg's intention about music composition, I would like to compose not abstruse but universal music for everyone. My music should depict our day-to-day emotions, feelings, senses, and thoughts. In other words, all of the themes of my music represent what all of us experience in our life. To actualize my aim, I will compose music based on my daily experience. There is no other way to realize universal music than extracting and crystalizing individual authentic experience. Monday, 8/28/2017

1464. 創ることと現象としての自己の考究

時が必然のごとく刻まれ、今日という一日が終わりに差し掛かりつつある。北欧旅行から戻り、日々が充実した形で淡々と自分の内側を通過していく日々が再び始まった。毎日毎日が新たなスタートであり、同時にそれは一つの大きな終焉に向かって進んでいるという確かな感覚がある。日々を確

かな足取りで進んでいるという確かな感覚を持つこと。その感覚を通じて、日々自分に課せられた使命の実現に向けて自己の表現物をこの世界に創出し続けること。

創造に次ぐ創造の人生。そこには創造の断絶はなく、絶えず何かを生み出していくというあり方が自然と体現されている。自分は「創る人」であるという確かな認識と覚悟を持って日々を生きること。創りながら創り、創りながら歩み、創りながら一日が終わり、そして気づけば人生がいつの間にか終わっていたという人生の過ごし方。

過去現在の偉人が残した創造物に感化されるものがあつたのであれば、それを享受するだけでなく、そこから自ら何かを生み出し、社会にその恩恵を還元していくという生き方。論文、日記、音楽を創りに創り、その過程が人生を創ることに結果として繋がっていくという生き方。

夜の九時に近づき、辺りが暗くなり始めている。「ああ、いよいよ秋が迫ってきたなあ」という様々な感情が入り混じる独り言が自然と漏れた。秋が過ぎればやって来る。五線譜からはみ出た音の世界が。五線譜をはみ出た高音と低音で張り詰めた冬の世界の到来が刻一刻と迫ってきている。秋を感じさせる夏の夜にそのようなことをふと思う。

先日知人の方とオンラインミーティングをしている時に、自己の現象性について興味深い意見交換をした。自己は様々な人や事物との関わりによって変化する現象であるという特徴。この特徴は個人的にとっても腑に落ちる。

今日も昼食後に仮眠を取っている最中に、夢を見ないコーザル意識に参入した。そこから夢を見るサトル意識に移った時、自覚的な自己が再び現れ、現象として明滅変化する自己の存在をまず実感した。そこから再び仕事に取りかかった時、他者との関係性によって自己の特性が変化していることに気づいた。それは単純な例で言えば、言葉の使い方であったり、自己の振る舞いなどに現れる。そうしたことを見るにつけ、自己はまさに取り巻く人々や事物によって千変万化する存在だと改めて痛感させられた。

日々この深淵な自己の特性を観察し、その考究を今後も続けていきたいと改めて思う。それは様々な関係性によって千変万化する自己の立ち現れ方の探究であるのと同時に、そうした立ち現れ方をする自己のさらに深層的なところに踏み込んだ探究である。自己について探究を深めれば深め

るほどに、これまでまるで気づきもしなかったようなことが明らかになると同時に、再び新たな謎を生み出す。絶えず作ることに加え、終わりのない自己の考究にも絶えず従事し続けたいと思う。

明日がまた、自己に関する新たな謎を残す日であることを願う。2017/8/23(水)

No.110: Conceptual Utilization

Any concepts should have utilization for practice. More accurately, any products or service based on academic concepts have to educate practitioners—or even the general public—and to enrich practice. For instance, developmental assessments constructed by various concepts in the field of developmental psychology should enhance the quality of educational practice and training. In addition, the results of assessments must be shared to make them public knowledge that can enlighten a number of people in diverse fields. I value constructs as long as they have conceptual utilization for society. Monday, 8/28/2017

1465. 二つの印象的な夢

今日は六時に起床した。この時間は辺りがまだ薄暗いままであり、五時台に日が昇る時期はもう過ぎ去ってしまったようだ。これから早朝の薄い闇が徐々に晴れていき、また新しい一日が始まる。

路上を見ると、昨夜の未明に激しい雨が降ったことがわかる。確かに、昨夜のある時間帯から突然雨音が聞こえ始め、一度目を覚ますことがあった。不思議なことに昨夜はそれ以外にも何度か目を覚ますことがあった。それにもかかわらず、起床直後の今の状態は良好であり、十分な睡眠を取ったという感覚があるので全く問題はなさそうだ。

昨夜の夢の印象が残っているうちに、夢の内容を書き留めておきたい。夢の中で私は、小さな書店にいた。この書店は今はない、地元で昔あった本屋である。この本屋は私が中学生ぐらいまでよく足を運んでいた場所であり、今でも店内の様子をありありと思い出すことができる。その書店の店内の隅で私は本を選ぶわけでもなく、他の客の様子を伺っていた。

自分の第二弾の書籍がこの書店にも何冊か置かれており、それをどのような人が手に取ってくれるのかを観察していたのだ。自分の書籍が置かれている近辺でしばらく待っていると、一人の男性が

私の書籍を手に取り、また別の男性がやってきて私の書籍に手を伸ばした。二人の男性が私の書籍をじっくりと読み始めた。すると、もう一人別の男性がやってきて、私の書籍を手に取り、熱心にその場で立ち読みを始めた。

この三人はいずれもビジネスマンらしく、身なりが整っており、あまり地元のその近辺では見かけない格好をしている人たちだった。その場で全員が沈黙のまま立ち読みを続け、しばらくすると、最初に書籍を手を取った二人が書籍を持ったままレジに向かった。

どうやら書籍を購入することを決心したらしい。一人のビジネスマンがレジで会計を済ませ、書店を後にしようとしたとき、私はその男性に声をかけ、自分の書籍を購入してくれたことにお礼を述べた。すると、その男性は、購入した書籍の背表紙を私に見せ、「えっ、こちらの本ですか？」と当惑した顔で声を発した。背表紙を見ると、それは財務デューデリジェンスの本であり、私の書籍ではなかった。

自分が何か早とちりをしてしまったようであり、少しばつが悪い思いに駆られた。その横で、残りの二人が自分の書籍を購入している様子が目に入り、とりあえず私は声をかけた男性に誤解してしまったことを謝った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は三匹のトイ・プードルと戯れていた。そのうちの一匹は、実家で飼っている愛犬だった。それぞれのトイ・プードルはとても知性が高く、人間の言葉を随分と理解しているようだった。見慣れない砦のような建物の一室で、私は三匹のトイ・プードルと遊んでいた。

小さな正方形のボードゲームのようなおもちゃを地面に置き、それを使って三匹のトイ・プードルと遊んでいた。このゲームは、ボード上の左側にランダムで数字が表示され、その右横にその数字に対応した絵文字のようなものがあり、その絵文字を正しく選べば次の数字が表示されるようなルールのゲームだった。

表示される数字を認識し、それがどの絵文字に対応するのかを理解していないと正解できないようなゲームだった。三匹のトイ・プードルがこのゲームを難なくこなしている様子を目の当たりにし、私はとても驚いた。すると、実家で飼っている愛犬が別のトイ・プードルに突然話しかけた。「○○ちゃ

んは頭がいいから、今度の試験も楽勝そうだよ。でも僕は、いくつかの科目が不安なんだ」と愛犬がつぶやいた。

この三匹のトイ・プードルが何やら人間が受けるような学科試験を受ける予定であることにまず驚かされ、愛犬の表情が少し寂しげに見えたのが気がかりだった。その後私は、こうしたゲームを使うのではなく、純粹に触れ合うことで三匹のトイ・プードルと交流を図ることにした。

夢はそこで静かに終わりを告げた。夢の内容を振り返っていると、辺りはすっかり夜が明けたようだ。書斎の窓を開け、早朝の新鮮な空気を取り入れて、今日の仕事に取り掛かることにした。2017/8/24 (木)

No.111: The Value of Music Composition

Composing music brings beautiful harmony in my daily life. In retrospect, I used to engage in just academic work everyday before I began music composition. In a word, my daily work did not have any rests; it did not have harmonic rhythm, which sometimes caused invisible fatigue.

However, my present daily work proceeds with harmonic and dynamic rhythm by virtue of music composition. Music composition for me is like a rest sign on a music score. It is indispensable to creating beautiful harmony in my daily life. Tuesday, 8/29/2017

1466. 二年目のプログラムの開始に向けて解決すべき問題

北欧旅行から帰ってきて以降、様々な雑務をこなす必要があったので、ここしばらくは専門書を読むことから離れていた。今日は午前中に、久しぶりに発達科学に関する専門書を読むことができた。端的に述べれば、本書は複雑性科学を教育研究や教育実践に応用した論文が寄せ集められたものである。九月からの実証的教育学のプログラムが開始する前に本書に目を通しておきたかったので、なんとも良いタイミングで本書を開くことができ嬉しく思う。

昨日、私たちの自己が様々な人や事物の関係性によって千変万化するという自己の現象性について言及していた。本書を読みながら、私たちの自己は、やはり「文脈的現象性」という特性を持つことが一段と明瞭になった。

本書には教育哲学者のジョン・デューイの思想について言及している論文が数多く掲載されており、デューイの教育思想に触れるたびに、彼がダイナミックシステム理論に相通じる発想を持って教育現象を捉えていたことに気づかされる。

私たちの自己の発現のされ方は、まさに置かれた文脈によって動的に変化するというのは、デューイの思想に関する記述を読みながら改めて思ったことである。今日は作曲の学習と実践と並行して、本書を最後まで読み進めたいと思う。

今日の午前中についてはもう一点述べておかなければならないことがある。それは、一年目のプログラムが終わり、二年目のプログラムが始まるこの時期にかなり手続き上の問題でバタバタしているということだ。具体的には、二年目から始まるプログラムに関して、オランダ政府の制度を用いれば学費をかなり抑えられることがわかり、その手続きに関して留学生支援課に直接足を運んだり、問い合わせをしているのだが、その回答に時間を要するようであり、思ったように手続きが進まない。

また、この制度を活用する条件として、あえて一年目のプログラムを終了させないことが大事だと論文アドバイザーから聞いていたのだが、そうこうしているうちに一年目のプログラムの卒業時期を迎え、八月末までに卒業手続きをしなければ、再度初年度のプログラムに登録をし直さなければならないということがわかった。

今朝はこの件について学生支援課に問い合わせてみると、仮に論文の提出を含め、諸々の手続きが八月末までになされなければ、もう一度プログラムに登録し直す必要があることが判明したのである。そうすると、手続き上、一年分の学費を一旦すべて収めた上で、九月分の登録料だけを払う形で後ほど学費が返金されるということである。これはとてもわずらしいため、早急に論文アドバイザーに連絡をし、論文の最終評価を提出してもらうことを依頼した。一年目の最後の最後に、そして二年目の直前にこのような問題と直面するとは思ってもいなかった。

気がかりなことがあると仕事に集中しづらいため、そうした気がかりを一度自分の言葉でまとめておくことによって、随分と気が楽になることがわかる。論文の最終評価の提出から、論文委員の承諾が降りるまでどれだけの時間がかかるのかを学習アドバイザーに尋ねておこうと思う。2017/8/24(木)

No.112: Truth, Goodness, and Beauty

Immanuel Kant and James Mark Baldwin highly valued the dimension of beauty, arguing that truth, goodness, and beauty have equally paramount importance. While composing music yesterday, I intuitively realized why they highly admired beauty without proposing any hierarchization of the three dimensions. Beauty dwells and permeates in any other dimensions; ethical judgment (goodness) and scientific exploration (truth) should embody beauty.

My ultimate purpose to compose music is to reintegrate beauty in other dimensions so as to overcome the modern pathology to separate truth, goodness, and beauty. Tuesday, 8/29/2017

1467.「ポイエティック・ロジック」と「内省的反復」

ほっと一息つくような黄昏時である。今日は本当に、企業人として働いていた時と同じぐらいに様々な関係者にメールをし、返信をもとにまたいろんな人にメールをするような慌ただしい一日だった。

今日は大学の関係者にあれこれメールをし、一年目のプログラムの終了手続きに関する問題を解決させるべく奔走していた。企業人だった頃を思い出してみると、このように毎日様々な人にメールをしては、それらの人から返ってくる返信にまたメールを返したり、また別の関係者にメールを送ったりしていた日々であったことを思い出す。

本日改めて痛感したのは、このようにメールの送信や返信に追われていては、落ち着いて専門書や論文を読みながら何かをじっくりと考えることができないということである。いつもは昼食後にしかメールを見ないようにしているのだが、今日はそのようなことをしていられず、止むを得ず一日の中で絶えずメールを確認していたが、案の定、そんなことをしては精神エネルギーが拡散漏洩してしまうということが明らかになった。

今日は極めて例外的な日であり、絶えずメールを確認しながら適宜連絡をしていたおかげもあり、早朝自分の心を煩わせていた問題をほぼ解決することができた。明日少しばかり何人かの関係者に連絡をすれば、今回の手続き上の問題は無事に八月中に解決しそうである。そうしたこともあり、今は大きな安堵感に包まれている。ようやく書斎の窓から外の景色を眺める心のゆとりを持つことが

でき、景色を眺めてみて、夕方の落ち着いた雰囲気さらに気分が鎮められる。明日からはまたメールを開くのは、一日一回、昼食後だけにして、自分の仕事に集中したいと思う。

今日全ての章を読む予定だった“Chaos, Complexity, Curriculum, and Culture (2005)”は、結局半分までしか読み通すことができなかった。予定通りに本書を読むことができなかったのは残念だが、いくつかまた発見事項があったのは確かである。一つは、チャールズ・サンダース・パースが「ポイエティック・ロジック」という大変興味深い概念を提唱していたことだ。それは「詩的論理(ポイエティック・ロジック:イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコが提唱)」ではなく、ポイエティック・ロジックは「創出的論理」とでも呼ばばいいだろうか。

この概念は複雑性科学の「オートポイエーシス」の考え方と関係しており、一つの思考や感覚が新たな思考や感覚を生み出すという私たちの特質を見事に捉えたものだと思う。私たちは、一つの思考や感覚から別の思考や感覚を生み出し、そのプロセスが延々と続いていく。

このような特性を考えてみると、本質的に人間は、やはり何かを絶えず生み出すことを宿命づけられているのだと思う。絶えず自らの表現物を創出し続ける人は、もしかすると例外的な特性を持っているのではなく、むしろ逆に、人間が持つ本質的な特性に純粋に従っているのではないだろうか、と思った。絶えず自己の表現活動に励み、絶えずこの世界に自己の表現物を生み出していくことは全くもって例外的なことではなく、人間本性に従った至って普通のことなのである。

本書を読みながらもう一つ重要なこととして、学習や発達において、単なる反復をしても無意味だということ再認識させられた。ダイナミックシステム理論に従えば、確かにダイナミックシステムとしての私たちは、絶えず何かを反復することによって日々を過ごしている。上記の「ポイエティック・ロジック」でも見たように、私たちの思考や感覚が絶えず新たに生み出されているというのはそうした反復の一種である。しかし、無自覚にこうした反復を繰り返しては何の学習も発達もない。

重要なのは、こうした反復には微細な差異が常に内包されているということであり、発達はそうした差異に自覚的にならなければ育まれるものではないということだ。そのため、「内省的反復」という考え方が重要になるだろう。反復される思考や感覚を絶えず内省的に見つめ、それらの中に存在する差異を掴み、新しい思考や感覚と内省的に向き合っていくというプロセスが、どのような学習にも

重要だということを痛感させられる。これらの論点についてはその他にも言及したいことがあるのだが、今日はここまでとしたい。また明日から落ち着いた探究の日々を過ごしたいと思う。2017/8/24
(木)

No.113: Muzio Clementi

I came across Muzio Clementi's music work. He was a great Italian composer in the mid 18th century to 19th century. Clementi and Mozart were contemporaries. As Beethoven highly esteemed Clementi's work—particularly his piano works, Clementi's gigantic edifice of piano music is respectable.

I have been listening to his piano music for more than 10 hours today. His piano sonatas or sonatinas would be proper learning materials for my music composition. Not only because his piano works are valuable learning materials but because he has been called “Father of the Piano”—he was a very prolific composer of piano works, I decided to purchase his music scores to analyze them for my music composition. Tuesday, 8/29/2017

1468. 65歳からの学士入学の検討

今朝は五時半に起床し、六時前から一日の仕事に取り掛かり始めた。起床したときのみならず、六時になろうとしている今もまだ辺りは闇に包まれている。

九月を目前に控え、季節がいよいよ変わったのだということを痛感する。季節の変化に合わせて気分にも変化があったのか、これまではエドヴァルド・グリーグの楽曲を聴くことが多かったのだが、今朝は久しぶりに、マウリツィオ・ポリーニが演奏するベートーヴェンピアノソナタ全集を最初から聴き始めることにした。今日はまず10時間弱の時間、ベートーヴェンのピアノソナタとともに仕事を進めていきたい。

昨夜就寝前に、少しばかり先の将来について考えている自分がいた。65歳か70歳になったあたりで、大学の教授職を放棄してもいいのではないかというものだ。その代わりに、その年を迎えたら、欧米のどこかの大学の哲学科と音楽科の学士過程に入学したいという思いが湧き上がってきた。

哲学と作曲をともに学べるような総合大学は世界でも限られているだろうから、場所はかなり限定されてしまうと思う。しかし、そうした点は問題ではなく、教授職から退いた後にとにかく哲学と作曲を大学機関で本格的に学び直すのも悪くないと思ったのだ。

私の世代が老年期に入る頃には、もしかすると平均寿命が100歳近くになっているかもしれない。そうすると、一般的に退職をする60歳や65歳から後40年近くの活動期間が残されていることになる。これくらいの期間があれば、また新たに何かをじっくりと深めていくことが十分に可能であると思った。そのため、昨夜の私は、そうした年齢になってあえて学士過程に入学するということを考えていたのだと思う。

哲学と作曲という組み合わせは、おそらく今の私の関心に多分に影響を受けているだろうが、この二つをじっくりとどこかの大学で学んでいる老年期の自分の姿を想像することができた。自分の子供以上に歳が離れた学部生と一緒に新しいことを学んでいる姿。そうした姿も悪くなく、むしろ想像するとワクワクするような期待感があつた。いくつになっても新鮮な気持ちで探究対象と向き合いたいと切に思う。また、何かを学ぶことや何かに挑戦することに関して遅すぎるということはないということ、自分自身で示すような生き方をしたいと切に思う。昨夜の就寝前に想像していた自分の姿が実現されるように、今日もまた新しい一歩を前に踏み出していきたい。2017/8/25(金)

No.114: One-Page Short Music

Debussy's music-like sky is manifesting in the sky of the evening in Groningen. I was wondering about how many measures I try to compose in a piece of piano music. First of all, I do not have any intentions to compose a large volume of masterpiece. Rather, I would like to compose as small pieces of music as possible everyday.

When I write something to express my thoughts and feelings in Japanese or English, I need a certain amount of words. However, the amount is not relatively large. In fact, it ranges from approximately 1000 words to 1600 words in Japanese; from 100 to 200 words in English. From this fact, I presume that enough measures could range from 16 to 32 to fully express my inner theme.

If a piece of music has only 16 or 32 measures, I can call it “one-page short music.” After a colossal amount of practice, I may compose a little bit longer piece of music. Anyway, 16 to 32 measures would be enough to express my story and conceptual or emotional theme in a musical piece. Tuesday, 8/29/2017

1469.「実証的教育学」のプログラム開始に向けて

辺りの闇が少しずつ開ける頃、マウリツィオ・ポリーニが演奏するベートーヴェンピアノソナタが書斎の中に鳴り響く。精密に刻まれていくその演奏はどこか科学的であり、それでいて演奏者の思想が具現化されているという点において哲学的ですらある。ポリーニの演奏を久しぶりに聴いて、そのような印象を改めて持った。

昨日は一年目のプログラムの終了に関する手続きで随分と慌ただしかったということを、昨日の日記に書き留めていたように思う。様々な関係者に問い合わせのメールをあれこれしながら奔走することによって、その問題の解決の目処が立ったというのが昨日の出来事だった。今日はその問題の解決に向けて奔走する必要はなく、昨夜に送ったメールの返信を確認し、論文アドバイザーにこの件についてもう一度連絡をすればいいだけである。今日はとても落ち着いた状態の中で自分の仕事に打ち込めそうである。そうしたこともあり、今日から再び本格的に専門書を読み進めたいと思う。

昨日、二年目のプログラムの最初の学期に履修するコースの情報を確認してみると、思った以上に内容が高度であることが判明した。去年はフローニンゲン大学での最初の年ということもあり、また自分で作成したカリキュラム構成の都合上、九月からの学期は一つのコースしか履修する必要がなかった。しかし、今年は九月からの学期に三つのコースを履修することになった。

それら三つは全て教育学に関するものであり、それぞれ「実証的教育学」「評価研究の理論と手法」「学習理論」というコースタイトルである。米国の大学院で取得した発達心理学に関する修士号、発達科学と複雑性科学に関するフローニンゲン大学での一つ目の修士号の後に、今回の三つ目の修士過程が始まる。

今回は実証的教育学に関する修士課程に在籍し、探究内容はこれまで学んできたことの延長だと位置付けている。しかし、当然ながら新しく学ぶことが多いことは確かであり、昨日三つのコースの

概要を眺めていると、要求レベルが非常に高いことがわかった。履修するコースの数も多く、それぞれ要求レベルが高いことから、少し早めに学習を進めていこうと思っている。

昨日注文から一ヶ月以上が経って、ようやく米国から一冊の専門書が届いた。それは“Evaluation: A Systematic Approach (2004)”というテキストであり、これと合わせて“Experimental and Quasi-Experimental Designs for Generalized Causal Inference (2002)”というテキストが「評価研究の理論と手法」のコースで課せられている必読書である。

他のコースはまだシラバスが完成していないようであり、事前にコースの情報を見たときには必読書が掲載されていなかったのも、他のコースでは複数の論文を読んでいくことになるだろう。いずれにせよ、今日から少しずつ上記の二冊に取り掛かり、学期が始まる前にこれらの二冊の中でコースで取り上げられる箇所を全て読んでおきたいと思う。2017/8/25(金)

No.115: Formalization and Conceptualization for Further Learning

—Thinking without the positing of categories and concepts in general would be as impossible as breathing in a vacuum—Albert Einstein

Whenever we create and express something, we need a specific form. Without forms, we cannot engage in creative and expressive activities. Furthermore, we have to formalize objects when we explore them. In other words, we cannot deepen our learning without formalization.

A way to formalize is diverse; it can be a concept. For me, the best way is to write through conceptualization, which navigates my learning into more depth. Wednesday, 8/30/2017

1470. 馬鹿の先

毎日日記を書くという日々。ここ数年以内に毎日論文を書き、毎日作曲をする日が来ることを強く願う日々。だが現状は、論文と曲の創出に向けた準備をただひたすらに辛抱強く行っている。欧州での生活を始めることが決まって以降、私は毎日少しずつ日記を書くようになった。

初めは毎日ではなかったかもしれない。欧州に渡る前後から、私は毎日日記を執筆せざるをえないような状況にあった。いや、執筆衝動のようなものが自分を駆り立て始めた、と言った方が正確だろう。それ以降、そうした衝動に駆り立てられる形で私は基本的に毎日何かしらの日記を書いている。自分でもどうしてこれほどまでに日記を毎日書いているのかと不思議に思うこともあるが、一日呼吸を止めた人間がどのようなようになるのかを私たちは簡単に想像することができるように、私はもはや日記を書くことなしでは生きていけない。

おそらく、人は毎日このような形と量で日記を書く私を嘲笑するかもしれない。それよりもむしろ、馬鹿だと思えるかもしれない。そこで一つだけ興味深いテーマが浮かんできた。それは、仮に自分が生涯を閉じるであろう残りの約80年間にわたって毎日日記を書き続けた場合、一人の人間が生涯にわたって生み出した巨大な表現物に対して、人は何と言うのかという点である。

端的に述べれば、そのような膨大な蓄積物かつ構築物を目の当たりにした時に、人は「馬鹿だ」という形容詞の代わりにどのような形容詞を使うのか、ということにとっても関心がある。もしかしたら変わらずに同じ形容詞を使うかもしれない。または別の形容詞を使うかもしれない。先ほど洗面所でそのようなことを少しばかり考えていた。

日記と論文の執筆と作曲さえあれば、他に何もいない生活。それらだけに打ち込む生活を早く実現させたいと願う。論文の執筆や作曲はおろか、実は日記の執筆ですらまだ始まっていない。それらは全て実験段階であり、今は本格的な表現活動に向けた準備段階である。

自分の中に眠っているものを呼び覚ましていかなければならない。未だ一切表に姿を現さない自己の潜在的な側面が、自分の内面世界の奥底に隠れていることを知っている。それに光を当て、光の世界に導き出すことによって、絶えず表現活動に打ち込みたい。実験に次ぐ実験、準備に次ぐ準備を愚直に行っていく必要がある。

それは後数年かかるかもしれないし、十年かかるかもしれない。あるいは、それ以上の年月がかかるかもしれない。いくら年月がかかろうとも、自分はそのに行く決めていた。逆に言えば、そこ以外にはどこにも行かない。そこに行くための一歩が粛々と毎日営まれる生活実践。そこに行けるかどうかなどは一切関係なく、そこに辿り着いたという前提で逆算的に毎日一歩だけ足を進める生活。

作りに作るということ。創出に次ぐ創出が自分の人生であり、最後の創出が自分の生涯の最後の作品であるという人生。

今日もまたそうした人生の貴重な一日であるということを改めて思い、今日という一日を最善に生き抜きたいと思う。自分にはそれしかできないのだから。2017/8/25(金)

No.116: To Reify Daily Experience By Writing

We go through an innumerable number of experience everyday, but we learn less than we think. One of the main reasons is that we do not fully embody each experience. It looks like as if such a daily life were empty.

We cannot learn anything in that kind of a vacant life. What we need is to thoroughly embody each moment or at least meaningful events that capture our soul. Whenever an event piques my soul and curiosity, I write it down to reify it in my inner world. A short writing is sufficient to embody our daily experience, and I believe that writing is a vital component of learning.

Wednesday, 8/30/2017

1471. 多文脈的熟成学習

今日はなぜだかいつも以上に充実した一日だったと感じる。特に何かいつもと変わったことはないのだが、どうしたわけか充実感が内側から滲み出してくる。

夜の八時に近づき、夕日が西の空にもう少しで沈みそうだ。一日の最後の光を拝んでいると、今日一日の充実感がさらに強く感じられてくる。実際のところ、今日は昨日からの続きとして、専門書一冊を読み終えるので手一杯であった。明日と明後日に控えているオンラインゼミナールの第四回のクラスに向けた準備があったため、専門書を読むことができる時間は限られていた。

その書籍を読み終えて、自らの学習に対する姿勢をもう一度見直したいと思う。とりわけ、何かのトピックについて学んでいく時に、複数の専門書や論文を通じて、そのトピックを多様な文脈の中で学んでいくことが重要になることを改めて実感した。これは知識の基盤を太くするだけではなく、一

一つの知識の根を他の様々な知識と組み合わせることを可能にする。多様な文脈の中で一つのトピックを学んでいくことにより、知識の根と基盤の双方が頑強なものになるのだ。

本日読んでいた書籍は複雑性科学と教育学を架橋する内容をテーマに持っていた。本書を読みながら、複雑性科学の観点をを用いれば、単なる繰り返しの形であるトピックを学んでいては学習が深まることはないということを痛感する。単純な反復学習では、知識の根が豊かな広がりを見せることはなく、結果として知識基盤が脆弱なものになってしまう。ただし、反復そのものが問題なのではなく、同じ知識項目を同一の文脈内で反復学習することが問題なのだ。

仮にある知識項目を学んでいく際には、多様な文脈の中でそれを反復的に学んでいくことが望ましい。ここからさらに私が気をつけようと思っているのは、多様な文脈で反復学習をある程度行ったら、一旦その知識項目から離れるということである。言い換えればこれは、知識項目に熟成期間を与えることを意味するだろう。成長や発達に向けて、寝かせる期間が不可欠であるのと同様に、知識項目の習熟に関しても、それをある程度繰り返し学んだら一度寝かすような時間をあえて設けてみる必要があるだろうと思うに至った。

これまでの私は、絶えず同一テーマを探究する傾向が見られたので、あえてそのテーマから一旦離れ、テーマそのものを寝かせることをより意識したい。ただし、単にそれが発酵されるのを黙って待つのではなく、一つの知識項目やテーマを寝かせている最中は、また別の知識項目やテーマの探究に取り掛かっていきたい。そして、それらの知識項目やテーマを包括する全体の領域についてある程度繰り返し向き合ったところで、その領域すらも寝かせるようにして、その間に別の領域を探究するという方法に乗り出してみたい。

自らの探究心が休むことなく燃え続けているがゆえに、結局何かを探究することから離れることはできないが、上記のように進みながら熟成させ、熟成させながら進むということに絶えず従事するように心がけようと思う。2017/8/25(金)

No.117: The Unique Universe in Music

I noticed that each great composer possessed and expressed his or her unique universe. An ancient Greek philosopher, Pythagoras explored music and found musical laws in the universe.

Plato followed Pythagoras' philosophy of music and elaborated music theory. The fact that the universe embodies music and vice versa is quite intriguing. Also, the truth that every great composer owns and manifests his or her unique universe is remarkably impressive. Wednesday, 8/30/2017

1472. 日々が新たな誕生日であるように

今日も昨日に引き続き、六時前に起床した。一日の活動を始めるために、毎朝の習慣である身体運動を行い、今日という一日を開始させた。

書斎の机に着く頃はまだ夜明け前であった。静かで暗い世界が外に広がっている。だが、もはやそうした闇の世界の中に飲まれそうになる自分はいない。もちろん、目の前に広がる闇の世界は今後より深くなっていくだろう。しかしそれでも、そのように屹立する闇の世界に圧倒されることはないだろう。今はそのように述べておきたい。なぜなら、再び闇の世界に圧倒される日が来るであろうから。

今日の起床直後に考えていたのは、日々が新たに始まることと自分自身が日々生まれ変わるというその感覚についてである。夜明けに呼応するかのように、一日が新たに始まることによって、自分の中で何かが明けていることに気づく。自分の内側の世界における夜明け。こうした夜明けの様子を毎朝確認することができる。

一日が始まることは、新たな自分が誕生することであるという思いがやってくる。そうであるならば、私たちの誕生日は一つではない。日々が新たな自分の誕生日となる。そのようなことを静かに考えていた。

グレン・グールドが演奏するバッハのゴルトベルク変奏曲が書斎に流れている。その旋律は夜明けを乗せる音の流れであり、まるで自己の再生誕を祝っているかのようである。気づかないうちに辺りの闇が消え、フローニンゲンの空が薄青く光っている。今日という日がまた始まる。新たな自己がまた始まりの時を迎える。

エマーソンは、自然とは豊かな意味が重層的に梱包された聖なるテキストであると述べている。確かにそうだ。今日の前に広がる自然から、私はいつもその時その時に異なる意味を汲み取り、それら一つ一つの意味は、自己の深層に染み渡る聖なる水のように思えることがよくある。

自然が持つ意味の梱包力に対して畏怖の念を持ち、またそうした豊かな意味を常に私たちに開示してくれる寛容性と解放性に対しても畏敬の念を持つ。自然の中に私がいて、私の中に自然がいる。自然と自己が共存するという真の意味はこの感覚であろうという確信。自然即自己・自己即自然の感覚を大切に、今日も一日を豊かなものにしていきたい。2017/8/26(土)

No.118: Classic and Jazz Piano Music

The progress of my music composition goes well. In the morning, I slightly changed how to establish my style of composition. What I have learned so far is classic music composition. I think that it can build the robust foundation of my music composition that is prerequisite for shaping what I want to express as music. Yet, since my intention is to express my inner world as music in a diverse way, I would like to add jazz piano music in the repertory of my composition.

Wednesday, 8/30/2017

1473.真の芸術体験と「言葉の断食」

昨日、オンラインゼミナールのオフィスアワーの中で芸術に関する大変興味深い対話がなされた。参加者の方の一人が、ニューヨーク近代美術館で開発された「ヴィジュアルシンキングストラテジー」という手法について教えてくれた。これは絵画を通じて探究心を育み、絵画そのものへの理解のみならず、自己そのものの理解を深めていくことに有益な興味深い手法である。この手法はそれほど難しいものではなく、絵画を見ながら数個の軸に沿って自らに質問を投げかけていくことだけを要求する。

この手法に関する話を聞きながら、デンマークやノルウェーで訪れた美術館での自分自身の体験を振り返っていた。振り返るというよりも、それは即座な気づきとして、私もこの手法に似たことを、知らず知らずのうちに自ら実践していたことがわかった。おそらくこの手法を活用すれば、あるいは自

分の中で意識的に問いを立てることを実践しようとするれば、どんな作品に対しても多くの問いを立て、作品から意味を汲み取り、それが自己のさらに深い理解につながっていくのだと思う。

しかし、両国で訪れた美術館の中で問いが立つ作品と問いが立たない作品があったのは、紛れもない事実であった。それら二種類の作品の違いは何なのだろうかと考える。一つの作品を見ることは、やはり一つの貴重な出会いなのだと思う。全ての作品に対して無理に問いを立てるのではなく、大切な出会いをもたらした作品と真摯に向き合い、その中でその作品に対して問いを立てていくという姿勢をこれからも貫きたいと思う。

作品鑑賞はまさに作品との対話であり、私たちが真にその作品と出会い、作品と真剣に向き合う時、問いが問いを生み、その循環過程が自己を深めることにつながるだろう。これは何も絵画のみならず、音楽にも当てはまる。

今書齋に流れるバッハの曲には、私たちの理解を超えるような重層的な意味が内包されている。一つ一つの絵画作品と楽曲は、本質的に意味の玉手箱だと形容できる。その玉手箱を開けるための鍵が必要なのだ。それは私たちから投げかける問いである。作品に内包された豊かな意味を汲み取るためには、問いが必要なのだ。

絵画や音楽を鑑賞している時、しばしば自己が捉えられるような感覚に陥ることがある。この感覚は、先日の北欧旅行でも感じたことである。オフィスアワーの中である方が「絵の中に自分がいて、自分の中に絵がいる感覚」ということを述べてくれた。まさに、これが二元論的な作品鑑賞を超えた真の芸術体験であるように思う。

自らを捉えて離さない作品と真に出会う時、私たちは問いを投げかけるよりも先に、その場で宙吊りにされるだろう。ムンクの『太陽』という作品を通じて得られた体験はまさにこれだった。それは、言葉を生み出そうとする自己の表層部分を否応なく黙らせる。魂が共鳴する作品は、自分が表面的な言葉を投げかけることを極度に嫌がるのだ。だから私たちを一旦黙らせるのである。

その場で宙吊りにされた私たちは、自己の深層部分に辿り着くことを余儀なくされる。その過程で起こっていること、それは「言葉の断食」であろう。新たな自己を開く深層的な言葉を紡ぎ出すためには、言葉の断食が必要なのだ。自らの存在と共振するような芸術作品は、言葉の断食を私たちに

突きつける。言葉の断食を経て、自己の基底にたどり着いた後、自然と問いが滲み出す。あの時の体験を振り返ると、まさにそのようなことが言えるだろう。

自己の深層から自然と問いが滲み出すと、後は洪水のように問いが生まれ始める。問いが問いを生み、自己が自己を開いていくという現象が起こるのだ。そう、それは「発達(development)」の語源である、フランス語の“desvolper”が象徴するように、自己を真に「開く」ということなのだ。2017/8/26 (土)

No.119: Towards the Integration of Jazz and Classic Music in My Music Composition

I wan to compose a piece of piano music with a slow speed probably because I feel an affinity with the flow of time with a slow tempo. Since yesterday, I have begun to take a MOOC offered by Berklee College of Music. This course is the introduction of music theory.

I have already completed the first two lessons among six, and I feel it as a great course to brush up my previous knowledge about music theory. The instructor is very emotionally and intellectually—or even spiritually—approachable to me. The instructor embodies a unique flavor and rhythm of jazz. I am not conversant with jazz music, but I think it is fun to incorporate rich aspects of jazz music into my music composition. How wonderful it is to compose music integrating jazz and classic music. Wednesday, 8/30/2017

1474. 一人の人間の一生

これから夕方に向かって時間が進んでいく。時計の針が午後の三時半を回った。今日は土曜日であり、いつも以上に辺りに行き交う人々の数が少ない。家の目の前の道路を時折車が走り去り、時折通行人が行き来している。何か重要な気づきが喉まで出かかっているのだが、それが完全に外に出ない感覚が自分を包む。

次回日本に一時帰国する際には、数年ぶりに叔父に会おうと思う。よくよく考えてみると、身内の中で話をすることができる同性は、父と叔父しかいないことに気づいた。二人の祖父が亡くなり、父と

叔父は私にとってより一層大切な存在となった。これまで自分を大いに啓発してくれた存在として、父と叔父に対して今でも多大な尊敬の念を持っている。

次回の一時帰国の際に叔父と会うための連絡をしている際に、葛飾北斎の話題となった。この話題になったのは、次回の帰国の際に、ぜひともすみだ北斎美術館と国立西洋美術館での北斎展覧会に足を運びたいという自分の思いがあったからである。

二人のやり取りの中で、「世の中は広く、色んな人が色んな人生を送りながら死んでいく」という趣旨の叔父の言葉に立ち止まらざるをえなかった。オランダで生活を始めて以降、この人生が自分に伝えようとしている事柄、そして人生の自らの歩み方について、何か考えを巡らせなかった日は一日たりとも無いように思う。

一人の人間が生まれ、死んでいくまでの一つ一つの歩みとその全総体は、何か掛け替えの無い尊いものを内包しており、それについて考えるだけで心が震える。一人の人間が生誕から生涯の幕を閉じるまでの歩みは、物語を超えた壮大な物語であり、それがいかに平凡なものに思えたとしても、それは平凡であるがゆえに非凡なのだ。

昨日、オランダ人の論文アドバイザーから暖かいメッセージをもらった。数週間前にノルウェーのベルゲンの街で、偶然に足を運んだスープ屋で働く女性から受けた暖かい言葉かけ。自分の深層にゆらゆらと沈んでいく印象的なやり取りは、枚挙にいとまがない。

自分とは異なる人生を歩く人たちが、自分の人生と重なり合う瞬間の不思議さ。いやむしろ、自分の人生は絶えず他者の人生と触れ合っており、自分の人生が孤立することは決してないのだという確かな感覚が静かに湧き上がる。この人生の中で、一度でも自分の人生が他者の人生と重なり合わなかったことなどあるだろうか。そんなことは一度たりともなかっただろう。

そして、これからの人生においてもそのようなことは決して起こらないだろう。自己の人生が他者の人生と相即的に絶えず一体として存在しているという、この大きな抱擁感を他にどのように説明したらいいだろうか。この感覚さえあれば、私はまた小さな一歩を進めていくことができるように思う。この一歩は、確かに自分の一歩だが、それは自分の人生における一歩として完結するものではない。

自らの小さな一歩が、他者の人生における一歩になるという事実。自分が一歩進むことによって、必ず世界のどこかの誰かが新たな一歩を踏み出してくれるという無上の連帯感。この断ち切ることのできない強固な絆が、私を毎日前へ一歩進めてくれているのだ。

自己の人生は自分の人生の中で完結することではなく、この人生が始まる前からすでに、幾千もの時代を遡った他者の人生と相即的に繋がっていたのである。そして、この繋がりは未来永劫途切れることはないだろう。それこそが一人の人間の人生の本質なのだと思う。

シベリウスのピアノ曲がただ静かに書斎の中を流れていく。様々な人たちとの何気ないやり取りに関する思い出が、流れることなく人生という川そのものになっていく。この川はあの川と繋がっており、全ての海と繋がっている。2017/8/26(土)

No.120: Life As a Scientist, Philosopher, and Composer

I made a devout vow to live as a scientist, philosopher, and composer throughout my life to explore truth, goodness, and beauty respectively. Such a way of living is realizable without any doubt; my feeling to imagine that kind of life looks like the cloudless crystal-clear sky.

It does not matter to me how much time it takes to explore the three realms of reality. All I wish is to continue the lifelong voyage to explore and integrate the three domains. Wednesday, 8/30/2017

1475. 専門領域の螺旋的深まり

夕食前に先ほど浴槽に浸かりながら、少しばかり自分の現在の取り組みや今後の取り組みについて整理をしていた。そのテーマについて意図的に考えようと思ったわけではなく、浴槽に浸かりながら天井を眺めていると自然とそのテーマに自己の思考が向かった。

夕食の前に読んでいた専門書は、教育政策やトレーニングプログラムの評価を行うための理論と方法に関するものだった。そこでふと、私の現在の関心が知らず知らず、能力を測定することやそのためのアセスメントを開発することだけではなく、アセスメント自体を評価測定することに向かっていることに気づいたのだ。

これまではまさに、能力をいかに測定するかの理論と技術を学び、実際にアセスメントの開発に従事することに携わっていた。そこから今は、そうしたアセスメントそのものの評価をするに関心が向かっていることに気づいたのである。これはすなわち、アセスメントを単に開発して導入するだけでなく、アセスメントを含むトレーニングプログラム全体の評価や、より大きな観点でいえば教育政策の評価など、より高い次元から人間発達に関する測定手法を捉えていくことに関心が向かっていることの証左だった。

今後はこれまでとはまた異なる関係者と協働作業をすることになるだろう、という予感がした。九月から始まるフローニンゲン大学での二年目のプログラムは「実証的教育学」ということもあり、その一つの主眼として、教育政策や教育プログラムの評価に関する理論と手法を学んでいくことになる。

自分のこれまでの専門領域に、また新たなものが積み重なっていく感覚がしている。こうしたことをぼんやりと考えながら、しばらくお湯に浸かっていると、派生的にまた別のテーマに考えが飛び火した。このように能力測定手法の開発から、開発したアセスメントそのものを評価し、関係当事者にいかに説明をしていくかの理論と手法を学んでいる自分の姿を見るにつけ、探究というものは螺旋状に進み、螺旋状に深まっていくことを思わずにはいられなかった。

そもそも、科学的な観点と哲学的な観点から人間発達を探究していくという大きなテーマが自分の中にある。そして、科学的な側面の中に、これまで探究を長らく続けてきた発達心理学があり、ここ数年において探究を深めている複雑性科学の諸分野があり、教育心理学や学習理論を含む教育科学が存在している。

思想のない研究者や実務家、そして専門的な理論と技術を持たない研究者や実務家には浅薄さしか漂わないため、科学的な研究に従事する上でも、具体的な実務作業に従事する上でも、専門的な知識と技術、さらには思想を育んでいく必要が大いにある。そうした考えがあるがゆえに自分は、科学的な探究と哲学的な探究の双方を螺旋を描くように推し進めているのだと思う。

教育という領域を取ってみると、子供の教育と成人教育への関心が行ったり来たりしている様子からも、螺旋状に自らの探究が深まっていく姿を見て取ることができる。自分の専門領域が拡張しながらも、それでいて深化していく姿を今後も見たいと思う。2017/8/26(土)

No.121: Intoxication by The Blackness of Blackness

The darkness of darkness, which is the essence of darkness, captured me in a dream last night. I had never seen it before, but it was the abyss of bottomless darkness. I was looking into the fathomless dark world through a tire embedded on the center of the roof of a house.

The tire looked like a door leading to the navel of the universe. I had never seen the “blackness of blackness” or “darkness of darkness.” This was my first experience to get drunk by the blackness of blackness. Thursday, 8/31/2017

1476. フランツ・シューベルトとの対話へ向けて

昨夜、全ての仕事を終え、作曲の学習と実践に取り掛かっていた。時間としてはごくわずかであったが、毎日何かしら作曲に関することに取り組みたいという思いから、短い時間でもいいので音楽と向き合っていた。すると突然、フランツ・シューベルトが残した曲とシューベルトその人自身に憑依されたような感覚があった。

シューベルトは31歳という若さでこの世を去りながらも、その短い作曲家人生の中で膨大な数の曲を残している。このよく知られたたった一つの事実が、私を根底から突き動かそうとしていた。シューベルトは作曲家としてなぜあれほど多産であったのか、何が彼を膨大な作曲活動に向かわせたのかということを含め、シューベルトに対する異様な関心が吹き上げてきた。

この春にウィーンを訪れた時、私はシューベルト記念館に足を運んだ。その時点においても、シューベルトの生涯と彼が残した数々の曲には関心があった。しかし、昨夜吹き荒れたシューベルトに対する関心は、その当時の比ではなかった。先ほどは、どうしてもシューベルトと対話をしたいという思いがこみ上げてきた。そうした思いを抑えることができず、どうすれば彼と対話をする事ができるかを考えた時、一つの、そして最良の手段は彼が残した楽譜を通じての対話しかなかった。今から200年近くも前にこの世を去った作曲家と時空を超えた対話をするためには、シューベルトが残した楽譜と向き合うしかないと思った。

今はまだ見えないことが多すぎる。ただ、人が書き残す文章と同じく、作曲家が書き残した楽譜には、その人の全てが込められているに違いない。そんな思いが彼が書き残した楽譜に私を向かわせる。

シューベルトは全部で21曲のピアノソナタを残した。これまで楽譜を購入していた出版社からシューベルトのピアノソナタの楽譜が出版されていないことは残念だったが、探してみるとその他の出版社から楽譜が出版されていることがわかった。それを購入し、シューベルトとの対話を少しずつ始めていきたいと思う。

シューベルト記念館にひっそりと飾られていたあのメガネ。そう、それはシューベルトが頭に浮かんだメロディーをすぐさま楽譜に起こすことができるように、就寝時にも外さなかったと言われる愛用のニッケル製のメガネである。絶えず音楽を生み出すことを宿命づけられ、いかなる時にも作曲活動に従事し続けたシューベルトに帰依し、逆に憑依されることの中で自らの仕事に取り組みたいという気持ちを新たに持った。

早朝のフローニンゲンの青空は、澄み渡る今の自分の気持ちを代弁している。これから昇ろうとする朝日は、今日ここから再度歩みを進めていこうとする自分の情熱を表しているように思えた。2017/8/27(日)

No.122: Contradictory Vectors of Development

The path of our development leads to coming back to ourselves. Our developmental process has two meanings: One is going further, and the other is coming back. The contradictory two vectors are the marrow of development. However, note that returning back to ourselves is not retrogression but involution for evolution. Presumably, it is called “anamnesis” or “remember” by ancient Greek philosophers. Thursday, 8/31/2017

1477. 私たちを待つ問い

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の出版記念ゼミナールの第四回目のクラスが先ほど終了した。全六回のクラスのうち、早いもので第四回のクラスが終わった。これまでの三回は、

書籍で紹介した概念をこちらから説明することや、書籍に書かれていない概念などを紹介することが多かった。一方、今回のクラスからは書籍の後半の内容を扱うということもあり、受講生の方にこれまでの経験から得られた知見などを尋ねる機会が多く、より対話型のクラスとなった。

当初から後半のゼミナールでは、受講生との対話を重視しようと思っていたが、改めてそうした形式のクラスの意義を実感することとなった。とりわけ、ゼミナールの受講生はどなたもその道での経験が豊富であるため、何かこちらから一方的に説明をするよりも、受講生の方の体験をもとに議論を深めていくことの方がより有意義だということを改めて思う。

私たち成人が学びを深めていく際に重要になるのは、これまでの自分の体験に紐付けながら学習内容と向き合っていくことだろう。その時に、受講生の体験と切り離された概念を講師から一方的に提供することは、ほぼ無意味であろう。実践をより豊かにし、それを自身の成長につなげていくためには、概念や理論が確かに必要となる。そのため、講師としての役割は、実践や成長に有益な概念や理論を紹介するという事は確かに大切である。

ただしその際に、受講生の方の既存の知識や体験と紐付けるように学習内容を提供していくことが肝になる。ジョン・デューイやアフレッド・ノース・ホワイトヘッドも指摘しているように、学習項目は血の通ったものでなければならず、自身の既存の知識や体験と結びつかない概念は単なる死物である。

講師は、学習者が自らの体験に学習項目を紐付けられるような場を作り、それを促す言葉掛けを行っていくことが重要になる。そこから初めて、意味のある内省が学習者の中で生まれ、学習者はクラスの中で新たな問いと向き合い、その問いをまたクラスの外の自分の生活の中に持ち帰るのである。このように、自らの体験に引き寄せながら学習項目と向き合い、問いを絶えず自ら立てながら学習を進めていけるようなサイクルを生み出すことが、成人学習における支援者の重要な役割の一つだろう。

受講生に意見を求める場面が多かったことが功を奏して、今日のクラスの中で、私が一度も考えたことのない問いを質問として投げかけていただいた。こうした問いと出会えることは、他者と共に学ぶ二人称的学習の最大の恩恵である。その問いに関しては私も明確な答えを持っておらず、クラス

の外に持ち帰ることにした。ただし、私が大変興味深く思っているのは、問いが立った瞬間に答えは既に生まれているということだ。

思考的距離や時間的距離がいかに遠かろうが、問いを生み出した瞬間に答えはもう生まれているのだ。つまり、問いと答えは同時生起するのである。これは、何か非常に大切なことを私たちに教えてくれるように思う。何かを知るためには、何かを深めるためには、何かを解決するためには、問いが必要なのだ。そして、問いを生み出すことができれば、答えはいつか必ずやってくる。問いが問いを生み、それが暫定的な答えを私たちに与え、再び新たな問いが自然と立ち現れるのである。

このサイクルこそが学習や成長に欠かせないものだと私は思う。問いは常に私たちが待っており、立てられることを渴望しているのだ。そして、その渴望感を満たすのはこちらから投げかける問い、もしくは自発的に湧き上がる問いであり、答えではない。人生の中の無数の問いが、私たちが常に待っている。

一人一人に固有の問いは、私たち一人一人に見つけられることを絶えず待っているのだ。それを見捨てることはできるだろうか。できるのであれば、何を見て人生を歩いているのだろうか。自分に固有の問いこそ、自分の固有の人生ではないだろうか。2017/8/27(日)

No.123: My Proclivity for Construction

My daily work consists of academic research and music composition. I notice that solving mathematical equations, composing music, and writing an academic paper share a similarity. The similarity is that the process is highly constructive. The process of meticulous construction gives me happiness and exuberance to engage in academic research and music composition. My proclivity may not be for those activities themselves but for constructing something to express myself. Thursday, 8/31/2017

1478. 言葉のクオリア

無風と無音が包む夕方のフローニンゲン。時刻が午後の八時に近づき、今日も残すところあと少しとなった。今日は日曜日であるから、今日が終われば今週が終わることになる。そして、それは新た

な週の始まりを手繰り寄せる。九月がもう間近に迫っており、いよいよフローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まる。その準備については申し分ない。

先ほど夕食中に毎日一つだけ食べることにしている、大きく真っ赤なトマトを見つめていた。その視線がトマトの果汁を踊らせるぐらいに、私は静かにそのトマトだけを見つめていた。すると私は、このトマトの赤さに関心を持った。言い換えると、このトマトが赤いということを感じるその感覚に焦点を向けていたのである。

私が焦点を向けていたのは、専門用語で言えば、「クオリア」と呼ばれるものだろう。トマトを見ながら、自分の内側の感覚に焦点を当て、トマトの赤さのクオリアを掴もうとしていた。赤色を見たことのない盲目の人に、赤さの感覚を言葉で伝えることは極めて難しい。ただし、盲目の人であっても、視覚以外の感覚器を通じたクオリアであれば理解することができるだろう。例えば、よく熟れたトマトの甘みという「甘さ」のクオリアなどである。そのようなことを考えながら、一度視線を上げ、夕日が沈みゆく遠方の空を見た。

すると私は、自己を取り巻くありとあらゆる概念の持つクオリアを自分の内側で味わい尽くしたいという思いが湧いてきた。例えば、「感謝」や「感動」のクオリア。「熱情」と「絶対無」のクオリア。「成長」と「今日」のクオリア。感謝が感謝であるその感覚。熱情が熱情であるその感覚。今日が今日であるその感覚を骨の髄まで感じ取りたいのだ。

日々が幸福の中で充実した形で営まれていくためには、「幸福さ」や「充実感」のクオリアを掴まなければならない。こうしたクオリアを掴めないのであれば、それらの言葉は単なるお題目に過ぎない。そこから、現代人の多くはある種の盲目状態に陥っているのではないかと思った。「盲目」と言ってしまうと視覚的な印象を与えかねないので、それは一つ一つの言葉のクオリアを感じられない感覚的な麻痺だと言った方がいいだろう。

感謝の念を伝えるためには、そもそも「感謝」のクオリアを自分の内側を通じて掴むという経験がなければならない。幸福感を感じるためには、そもそも「幸福感」のクオリアを自らの内側に発見しておかなければならないのだ。全ての言葉は本質的には、無限の階層性を持ったクオリアが詰まって

いる。その質的な差異を捉えていくのは私たちに課せられていることであり、それを放棄してしまうと、どんな言葉も表面的に一人歩きを始める。

世の中で見聞きする言葉の多くに浅薄さを感じる人が多いのは、言葉のクオリアを私たちがないがしろにしているからではないだろうか。そうした状態にあって私たちに求められるのは、ここでもう一度自分の言葉の一つ一つを内側から捉え直していくことだと思う。一つ一つの言葉が持つクオリアは重層的であるがゆえに、一つ一つの言葉と向き合えば向き合うほど、言葉のクオリアはそれが持つ深層的な感覚を私たちに開いてくれる。私たちが一つ一つの言葉と真摯に向き合うというのは、言葉に命を吹き込むことに他ならず、それが言葉のクオリアを呼び覚ます。

日々を幸福さの中で充実して過ごすためには、自己を取り巻くありとあらゆる言葉をもう一度根底から捉え直す必要があると改めて思った。今の私には感じることのできない熱情が自分の内側にあり、闇夜よりも深く、太陽よりも明るい幸福感と充実感があるに違いない。2017/8/27(日)

No.124: My Zeal for Academic Research

My zeal for academic research ignited again. I will conduct educational research on MOOCs in the second year at RUG. My avidity for research on education has two facets; evidence-based education and philosophy of education.

In parallel with my research on MOOCs, I will explore philosophy of education. My central interests in the field of education are the purpose of education and philosophical discourses on human development. My second year at RUG provides me with ample opportunities and time to explore MOOCs and philosophy of education, although I will learn the latter by myself. Thursday, 8/31/2017

1479. 感覚世界に広がる無数の扉

朝はいつも静かにやってくる。今日も六時前に起床し、辺りはまだうっすらとした闇に包まれている。昨夜、とても綺麗な三日月を見た。黄色く輝く三日月が闇夜の中に浮かぶ様子はとても幻想的だった。三日月の姿を静かに眺めながら、今というこの瞬間に自己が完全に溶け出しそうだった。

過ぎ去りし時ではなく、やって来る時でもなく、今に落ち着くことの大切さ。過去や未来に行こうとする自分を緩め、今に落ち着いてみる。今というこの瞬間に安息を得るということは、日常忘れがちなのだが、極めて大切なことなのではないかと思う。あの三日月はそうしたことを教えてくれた。

昨夜は就寝前に様々な考えが吹き上がってくる事態に見舞われた。真っ暗な寝室の中で、吹き上がった主要な考えを枕元に置かれている裏紙に書き殴った。早朝、その走り書きを改めて眺めている。夢の世界のシンボルと同様に、就寝前の自分の考えは、往々にして覚醒時の理性的思考では理解に苦しむことがある。だが、ここで昨日の就寝前に走り書きをしたメモの内容をまとめておきたい。

メモの中で最も重要なものは、私たちの感覚世界には無数の扉があるということだった。一つの扉を開ければ、必ずまた別の扉が待っている。感覚世界の豊かさや奥深さというのは、こうした無数の扉の存在による。もう少し丁寧に言えば、感覚世界の一つ一つのドアの先にさらに豊かな感覚世界が広がっているということである。このようなことを考えていると、突然大きな憤りを覚えた。

憤りをもたらしたのは、私たちがついつい感覚と言葉を完全に別個なものだと捉えてしまう、単純な二元論的発想に陥りがちだということだった。感覚世界に広がる無数のドアについて考えを進めていくよりも先に、この問題について少しばかり考えていた。私たちは言葉と感覚がついつい異なるものかと思いがちである。確かに、両者は固有の特徴を持っているのは確かだが、言葉には常に感覚が内包されており、感覚が真に深まっていく際には言葉の助けが必要となる。

まさに言葉というのは、感覚世界に存在する無数の扉を開ける鍵なのだ。私たちがより豊かな感覚世界に入っていくためには、言葉という鍵が不可欠であり、その鍵を磨かなければならない。錆び付いた鍵では扉は開かないのである。言葉という鍵を磨かない者に、感覚の重要性を語る資格など一切なく、そうした者は真に豊かな感覚世界に一生入っていくことができない。そのようなことがメモの上部に書き残されていた。

感覚世界に存在する扉と鍵は常にセットなのである。なぜ私たちはそれらを無意味に切り離そうとするのだろうか。言葉と感覚を切り離してしまうと、言葉も感覚も深まりはしないだろう。両者は二つで一つであり、磨かれた言葉が感覚世界の扉を開け、その先に待つ豊かな感覚世界がまた言葉を

磨き、言葉の世界をさらに豊かにしてくれるのである。そう、感覚世界というのは即言葉の世界でもあり、二つの世界はつながっているのだ。感覚の重要性をいかに説いたところで言葉をないがしろにしているのは、感覚世界が深まることはないのだ。逆に、言葉の重要性をいかに説こうが、感覚をないがしろにしているのは、言葉の世界が深まることはないのである。二つの世界は絶えず不可分の関係を持っているのだ。

感覚世界と言葉の世界の相即関係を見たとき、二つで一つである内面世界をさらに深め、より豊かにしていくための道は、感覚と言葉の双方を取り戻し、それらを磨いていくことにあるのではないかと考えた。それを放棄するとき、私たちは貧困な内面世界に一生閉じ込められてしまうだろう。

2017/8/28(月)

No.125: A New Skill Domain

I have currently been constructing a new skill. Music composition is a new skill domain for me. While I learn music composition, I notice again that our skills are domain specific. It means that we need to construct high skill levels in order to perform well in a specific domain.

Although our skills are interdependent, they are relatively independent. In fact, I cannot find any substitute skills for music composition that are already within me. Therefore, I have to build this skill from scratch. According to Kurt Fischer's dynamic skill theory, practice and support are crucial for skill development. I will make full use of my resources to practice composition and to obtain necessary support. Friday, 9/1/2017

1480. 辛さを抱え、無音世界からの一歩へ

自分の道。絶対にやって来ない日に向けて歩み続ける道。

この世界の人々が、各人の充実感を見出し、幸福さの中で毎日を送ることができるのであれば、それ以上に素晴らしいことはこの世にないのではないだろうか。だが、それが実現する日はやって来ない。少なくとも、今私たちが生きている時代において、そんな日は決してやって来ない。とても辛かった。今朝はなんだかとても辛かった。

私たちが各人固有の充実さと幸福さを感じながら生きることができないこの世界の姿は、私をとても辛い気持ちにさせた。しかし私たちは、この絶対にやって来ない日の実現に向けて歩き続けなければならない。私は独りでもその道を歩き続けたいと思う。

この世界の全ての人々が充実感と幸福感に満たされる形で毎日を過ごすという、実現しない日の実現に向けて歩き続けなければならない。自分が歩く道はそれしかない。絶対にやって来ない日に向けて歩き続けることを考えた時によぎったあの辛さが、すり減って消えてしまうほどに歩き続けたいと思う。

うっすらとした闇が消え去り、いつの間にか辺りが多色的世界に変容していた。小鳥の鳴き声が遠くの方から微かに聞こえて来る。九月に向かう足音が聞こえる。書斎の窓の向こう側の世界を眺めてみると、道路に植えられた木々の葉が少しずつ黄色くなり始めていることに気づいた。

紅葉し始めた植物を見ると、秋の足音が確かに聞こえて来る。新たな季節の足音を耳にしながら、自分の内側の季節の足音に耳を傾けてみる。そこにあったのは無音の足音だった。今の私には、自分の内側の次なる季節の足音を聞くことができなかった。聞くことができたのは、その無音の足音のみである。

無音世界の中で無音を聞くということ。どうやら今の私は、この無音世界を通っていかなければならないようだ。無音即有音。無音世界の中にはいついかなる時でも、多種多様で豊かな音が溢れているはずなのだ。その音を掴み、その音を聞き、どうしてもそれを言葉や音楽として表現したいと思う。

心を刺すような柔らかい朝日が辺りをより一層強く包み始めた。そろそろ今日の仕事に取り掛かりたい。実現しない日の実現に向けて、辿り着けない場所に辿り着くために、今日もまた足を一步だけ前に出したい。2017/8/28(月)

No.126: Somatic Images for Music Composition

Having images in my mind is the first step for learning. The images should be connected with my body. In other words, the mental images require my physical senses, which can be called “somatic

images.” Once I get an image of a learning object in my mind, my learning can start from there. Otherwise, it does not begin. In any case, capturing somatic images in my mind is the initial step to learn music composition. Friday, 9/1/2017